

創立百三十九周年記念式典 校長式辞

記録的な猛暑に見舞われた日々が嘘のように、清々しい空気が校舎に漂う季節となりました。本日は、高橋同窓会長様、渋江PTA会長様はじめ多数のご来賓のご臨席を賜り、山形県立山形東高等学校創立百三十九周年記念式典を挙げていただけますことは、この上ない喜びであります。

さて、私は本校の校長として、創立記念式典における式辞をこれまで三回述べてまいりました。令和二年には、明治十七年の創立から二度にわたる火災による校舎焼失と再建の過程や、大正期における秩序ある自由主義の校風の確立など、先人達が幾多の困難を乗り越えながら築いてきた栄光の歴史を振り返りました。令和三年には、常設国際司法裁判所所長を務め「世界の良心」と称された安達峰一郎氏、大蔵大臣及び日銀総裁を務められ、我々後輩にこの奉公旗を残された結城豊太郎氏、そして戦局の厳しい折、第四十一代内閣総理大臣を務められた小磯國昭氏、これら三名の偉大な先輩方が、十代半ばで高い志を立て、国家や国際社会で多大な功績を残されたことについてお話ししました。そして去年は、山形大学や山形南高校、山形北高校などの県内他校とのいわば血縁関係に焦点を当てて本校の変遷を概観するとともに、明治以来の本県中等教育の歴史の中で、本校が中心的な役割を果たしてきたことについて論じました。これらの式辞の原稿は本校ホームページの「校長より」のページに掲載していますので、興味のある方はお読みください。

本日は、本校の歴史と伝統を踏まえた上で、現代における本校の役割や教育理念、そして今後の展望について述べたいと思います。文部科学省は令和3年に全国の高等学校設置者に対して、各学校の存在意義や社会的役割、目指す学校像をスクール・ミッションとして再定義することを求めました。山形県教育委員会が令和4年3月に定めた本校のスクール・ミッションは次の通りです。『文武両道』『質実剛健』『自学自習』の校是のもと、校歌にある「国家の運命ををしく負はむ」という志を胸に、地域と国際社会の発展をリードする人を育成します。そのため、普通科・探究科における高度な学びや探究型学習等に自立した学習者として取り組み、自己実現を図る力を育みます。」というものです。これについて、私なりの解釈や感想を含めながら少し掘り下げてみたいと思います。

始めに、本校で育成を目指す人物像から見てみましょう。大正十三年、土井晩翠が作詞した本校の校歌は、本県を象徴する山々の雄大な姿にインスパイアされ、幾千の有為な人材を輩出してきた栄光の歴史を引き継ぎ、自分も将来は国家の運命を堂々と担っていこうと決意を固める様を謳っています。難関を突破して本校への入学を果たし、この校歌を初めて聞いた時、そのスケールの大きさに奮い立つ思いをした人も多いのではないのでしょうか。このような高い志を持って、社会の発展を牽引する人を育てるというミッションを負い、本校は山形県初の県立中学校として設立されました。そして、実際の活躍の場は地域であれ、国際社会であれ、リーダー育成という本校のミッションは現在に至るまで立派に果たされており、未来においても変わることがないものと私は信じています。

次に、冒頭にある三つの校是についてですが、これらは、高校生活の中で実践すべき行動指針と言い換えても良いでしょう。まず、「文武両道」ですが、古来より精神と肉体のどちらも秀でた人が尊敬されてきました。そのため、江戸時代の藩校でも、明治時代に設立された中学校でも、「文武両道」を方針に掲げ、学問と武芸の両方をバランスよく極めるこ

とを奨励する学校は数多くありました。現代の学校においては、学習と部活動の両立という狭い意味で用いられることが多いようですが、今後の学校の役割を考えた場合、部活動に限らず、地域におけるスポーツ・文化活動や、生徒会活動、探究活動など幅広く捉えて良いでしょう。これらの活動に主体的に粘り強く、多様な人々と協働しながら取り組むことにより、人間としての幅を広げることを奨励したものと私は解釈します。

二つ目の「質実剛健」について、そのルーツを辿ってみると、明治四十一年に天皇より発せられた「戊辰詔書」にあるようです。この中で、日露戦争後の停滞した社会を建て直すため、国民は質素を重んじ勤勉であり続けなければならないと述べられたことに由来するという説があります。このため、明治・大正期に設立された日本全国の伝統校でこの校是を掲げる学校がたくさんあるわけです。当時と比べて圧倒的な物質的豊かさを手に入れ、働き方改革が叫ばれている現代において、ひたすら慎ましく黙々と働くことを理想とする価値観は失われつつあると思いますが、少なくとも高校生的心構えとしての「質実剛健」、つまり、飾り気がなく誠実で、心も体も逞しく健やかなことは、普遍的な美德と見做して良いのではないかと私は思います。

三つ目の「自学自習」について、その語源は定かではありませんが、大正五年に全国校長会が作成した中学校教育の方針の一つに「自習自学の気風を馴致すること」がありました。ちなみに、「質実剛健の気風を養成すること」もこの方針の一つです。学問は本来、人から与えられるものではなく、知りたい・学びたいという欲求に突き動かされて、自ら先哲の教えを調べ、自ら体験し、考察し、知識として獲得していくものでしょう。ましてや科学技術の進歩や社会の変化が激しい現代に適応するためには、学校を卒業した後も常に学び続けることは必要不可欠です。そのため、高校において自学自習の術を身につけておくことは極めて大切なことなのです。

本校のスクール・ミッションの後半は、三つの校是に示された行動指針に従って、目指す人物像に求められる必要な資質・能力を身につけさせるため、本校ではどのような教育を提供するかを示しています。山形県教育委員会は、平成三十年に、変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力を身につけさせるとともに、大学入試改革に対応するため、本校を含む県内の三校に、従来の普通科に加えて探究科を設置しました。当時私は教育委員会において、探究科のカリキュラムの骨格を整備するとともに、県内の中学校を訪問して、探究科設置の意義を説明する仕事に従事していました。一方本校では、当時の佐藤校長先生をはじめとして先生方のご尽力により、本校の生徒に相応しい高度な学びを可能とするカリキュラムが編成されました。また、それ以前は一部の希望者を対象として実施していた「山東探究塾」を普通科・探究科全員が取り組むプログラムとして、外部の連携機関の開拓も含めて完成させてくださいました。この「山東探究塾」に取り組む意義は、現在学んでいる生徒の皆さんが一番よく理解していることと思います。すでに進学実績の面で少しずつ変化が見えてきましたが、この学習の本当の成果は、皆さんが将来社会に出て、実際に様々な課題の解決に取り組むときに大いに発揮されるものと信じています。

来年本校は創立百四十周年を迎えます。現在、同窓会では、記念事業の一環として、正門門柱の復元建設に取り組んでおられます。この門柱は明治二十六年に現在地に初代校舎が建設された時から立っているもので、近年は風化により大分傷んでしまいました。来年には、末長く続く本校の輝かしい未来を象徴するように、立派な門柱が復元されることで

しょう。この恩に報いるため、ここで学ぶ私たちは、羊頭狗肉とならないよう、さらに素晴らしい学校づくりに励んでいく覚悟を持ちたいと思います。

令和五年十月二十七日
山形県立山形東高等学校
校長 須 貝 英 彦